

映画に愛をこめて

アメリカの夜

イーストマンカラー
パナビジョン

TRUFFAUT'S
DAY
FOR
NIGHT

☼かいせつ

「恋のエチュード」「突然炎のごとく」など秀作を連発して、常に意欲的にフランス映画界の新しい地平を切り開き続けているフランソワ・トリュフォー監督が、彼の「分身」ともいえるべき俳優ジャン・ピエール・レオにまたも主演させて完成した最新作で、今年度アカデミー外国語作品賞ほかニューヨーク批評家賞など数々の国際的な賞を獲得した名作である。

題名の「アメリカの夜」（夜のための昼）というのは、カメラのレンズに赤色フィルターをとりつけ夜のシーンを昼間に撮影することを指しており、もともとアメリカのハリウッドで創始されたものだが、実際に夜間に撮影するよりもこれのほうがずっとホンモノらしく見えるところから〈真実〉と〈真実らしく見えるもの〉とのどちらに本当の真実は存在するのか? という重大なテーマをも、トリュフォーはこの映画を通じて提起しているといえる。監督のトリュフォー自身が、劇中の映画の監督の役で出演しているのも言わばこのテーマの具体化とみてよからう。

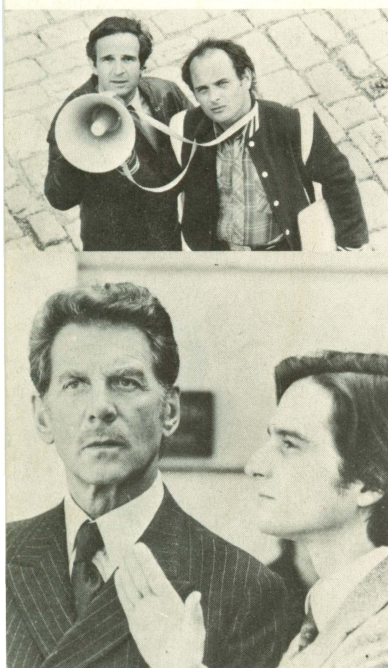
トリュフォーとレオをめぐる出演陣もしごく多彩で、ハリウッドから招かれた人気スターを演じるためわざわざハリウッドから招かれた人気スター、ジャクリン・ビセッ（「ブリット」「大空港」を筆頭に、往年の二枚目ジャン・ピエール・オーモン、「黒衣の花嫁」のアレキサンドラ・スチュワルト、「ブラザー・サン シスター・ムーン」のバレンチナ・コルテゼたちが、それぞれに、この映画での俳優役とその俳優が劇中で扮する登場人物の役とをあざやかに演じ分けている。脚本を書いたのはトリュフォー自身と、常に彼のように協力者であるジャン・ルイ・リシャール、シュザンヌ・シフマンの三人。撮影はピエール・ウイリアム・グレン。

なお劇中で撮影される映画の題名は「メラを介绍します」とい、フランス青年がイギリス娘と結婚して、彼女を両親に引き合わせるため実家へ帰ってきたところ、その青年の父親が娘と恋に落ちてしまった悲劇がおこる——といったストーリーで、いかにも常套的なこの三角関係メロドラマの中に、トリュフォー監督は、古き良き時代に人々から最も映画らしい映画だと思われてた映画への郷愁を、彼らしい心のやさしさでしみじみと謳い込んでいるのである。

(上映時間) 一時間56分

☼ものがたり

「真実」と「真実らしくよそおわれたもの」とは、いつも裏と表をなしていて、それを見分けるのはむずかしい。ひよつとすると、真実ら



しく見せかけたものの中にこそホンモノの真実はあるのかも知れない。映画がちやうどそれだ。いまパリで新作をつくっている撮影所の内幕が、何より良きその見本とは言えまいか。

その映画の監督の名はフェラン（フランソワ・トリュフォー）。主演スターは若手のアルフォンス（ジャン・ピエール・レオ）と、彼の本当の父親で映画でも彼の父親役をやっているアレキサンドル（ジャン・ピエール・オーモン）、その妻に扮するセブリーヌ（バレンチナ・コルテゼ）、そしてヒロインを演じるジュリー（ジャクリン・ビセッ）——この四人。それぞれの私生活をのぞかせながら撮影は開始されたが、せっかく撮影した場面のフィルムが現像所のミスで台なしになったり、女秘書役で出演の娘（アレキサンドラ・スチュワルト）が途中で妊娠中とバレてしまったり。監督のフェランはこれらの大混乱をなんとかうまく取り仕切ろうと懸命だ。

危険な車の暴走シーンを撮るためイギリス人のスタントマンがやとわれてきた。彼の男性美に浮気なスクリプト・ガールのリリアヌ（ダニ）はたちまちゾッコン。彼女に夢中だったアルフォンスをあつさりふって駆け落ちしてしまった。失意のどん底につき落されたアルフォンスは主役をおりと言いつつ、スタッフ一同大あわて。そんな彼の子供じみたわがままを思いとどまらせたのはなんとジュリー。気がついたら彼女は彼の腕の中にいて、二人はその夜のベッドでとうとう夜明けをむかえてしまった。ところが翌朝、アルフォンスがジュリーとのことを公表してしまつたから大変。そんな気など毛頭なかつたジュリーはまたまた昔の病気がふり返して神経がおかしく落ち着きをとる夫のネルソン博士がその治療にとんできて、ようやく落ち着きを取り戻す仕末。

もつともドラマチックな事件がその直後に起つた。アレキサンドルが自動車事故で死んだのだ。幸いアレキサンドルの出演場面中、最後の1シーンをのぞいて全部終わつてた。アルフォンスが背中から父親を射ち殺すシーンだ。どうせ背中を見せるだけだからと、さっそく代役が起用されて、無事撮影は終了した。

撮影隊の解散するときがきた。ジュリーは夫といっしょに飛行機で発つていった。アルフォンスは日本でロケされる新作の出演をOKした。TVレポーターがやってきて大道具係にマイクを向けた。撮影中になにか困難な問題は起こりませんでしたか? という質問だ。大道具係は明るい微笑でそれに答えた。『なにもかもともうまく行つたよ。我々がこの映画を楽しんで作つたように、お客さんものこの映画を楽しんで見れば、それでもう何も言うことはないな』。

